

社会思想史学会第 50 回（2025 年度）大会

セッション B 「戦後思想再考——《始まりを問い合わせる》その 5」実施報告

司会人：川本隆史

第 35 回大会(2010 年)を嚆矢とするこの連続セッションだが、10 回目を迎えた 2021 年度大会より《始まりを問い合わせる》という副題を掲げて、日本の《戦後思想》が始動する時点に焦点を絞り、その《始まり》の形およびその思想的内実に立ち入った検討を加えてきた。5 回目となる今回は、次のような三島憲一の基調報告を受けて活発な《問い合わせ》がなされている。

【戦後初期の日独の代表的雑誌の比較——自己批判と復興の設計図】

戦争直後に当時の日独の代表的な雑誌である岩波書店の『世界』とカトリック左派系の *Frankfurter Hefte* を比べて、共通性や違いをいくつか指摘し、最終的にはマルクシズムに対してどのような位置どりをしていたかについて報告した。

戦争を引き起こした構造やメンタリティの批判は両誌に共通するが、扱い方は異なる。『世界』の場合には丸山眞男の有名な論文にあるように「抑圧の移譲」や「無責任」体制、それ以外の執筆者でも、近代化の遅れや封建性の残滓、戦前の資本主義の構造などが批判的だった。また、初期の『世界』では、天皇制の自由主義的かつ文化主義的な再編が目指されていた。それにたいして *Frankfurter Hefte* では、ドイツ知識人が持っていた体制への順応体質、政治への無関心などが槍玉に挙げられている。日本の議論では、江戸時代以前の詩文の伝統への批判は薄かったが、ドイツでは、ルターからドイツ観念論、そしてニーチェに至る伝統全体が（音楽の伝統も含めて）不信の目で見られることになった。それに対してアデナウアー共和国の側から持ち出されたのは、ドイツの伝統の代わりに、西欧の伝統を再建の蝶番にするという戦略だった。「自由なキリスト教ヨーロッパ」がキャッチフレーズとなり、これはヨーロッパ統合の思想ともなったが、*Frankfurter Hefte* の執筆者の多くはこれにも批判の目を向けていた。

圧倒的な反共一色の西ドイツで、同誌掲載のカトリック社会派の多くの論文がマルクスの資本主義分析を全面的に取り入れながら、労働者による自己管理は拒否して、労働者の資本参加などの一連の社会政策によって、党官僚制の圧倒的支配という東側の過ちを踏襲しない方式を模索していた。いわゆる社会的市場経済の発想である。彼らは、長いこと弾圧の中で戦ってきた労働運動を評価するのが共通の特徴である。

資本主義を社会的規範によって改編しようというこのプログラムは、マルクス主義を歴史ナレーションに組み込む手続きでもあった。これがマルクスにおける批判の毒を抜き、無害化する方策、つまり歴史への封じ込めなのか、批判理論がしているように批判の毒を維持しつつ戦後の新しい経済社会への展望を考えているのか、おそらくこの両面がこの雑誌の

特徴であろう。

それに対して、『世界』の場合は、当時の林健太郎のような自称マルクス主義正統派の硬直した議論と大内兵衛のように、経済官僚的発想が支配的ななかにも、左岸に「上がれば、春風が吹いているかもしれない。何とかして、少しでもその方へいきたいものである」といった文章のように、社会主義もしくは「左」に流し目を送る議論も多い。ただし、戦後の新しい状況の中でただ「左」に流し目を送るだけでは、実際には、保守派の経済再建政策、多くの犠牲を伴った再建政策に加担するより他に道がなかったようだ。

この基調報告に対して討論者・中野敏男は、二つの質問と一つの意見を提示した。

質問の第一は、〈戦後ドイツでも「西洋の理想化」という問題があったと指摘されたが、その時に「アメリカ」の存在はどのように扱われたか〉であり、質問の第二は、〈反・反共の理論的模索があってマルクス主義についても「歴史化」による相対化と共に「批判性」の維持が試みられたということだが、それは「フランクフルト学派」においてどのような結果をもたらしたか〉である。また意見は、三島報告における林健太郎と大内兵衛の扱いで、1948年頃のこの両者は保守派と革新派という後のイメージとは正反対の立場取りに見えるが、戦後体制への参与という視角から見れば実は一貫していて、戦時の両者の位置取りとも整合的に理解できる、というものだった。質問に対する三島の答えは、〈両質問とも実は非常に微妙な問題を含んでいて、それに内在する「矛盾」はなお「止揚」されていない〉とのことだった。

もう一人の討論者・初見基との質疑応答のポイントは以下の通りである。

〈戦後間もない初期の CDU には「社会主義的」傾向があったが、W. Dirks や E. Kogon らのキリスト教社会主義がどのような位置を占めたのかいまひとつ把握できない〉という質問に対して、もともと西部ドイツはカトリックが強かったことに加え、戦後のあらたな社会を求める流れのなかでカトリック左派の議論が一定の影響力をもったという点で、日本での仏教や神道とは事情が異なっている様が紹介された。〈“Abendland”という言い回しが用いられる際に、キリスト教あるいは「ギリシア以来」の伝統といった恣意的な「歴史の連續性」に根拠を求める発想があり、「デモクラシー」にしてもそうした面があるのではないか〉との問いには、『啓蒙の弁証法』で挙げられる「ギリシア」もいわば“narration”であった、そして近年は「ユダヤ-キリスト教文化」といった言い回しが好まれて使われているが、これにも留意が必要だと返答がなされた。

続いてフロアからは、時安邦治会員（学習院女子大学）が三島報告における「歴史化」の含意を、田中将人会員（岡山商科大学）が「悔恨共同体」（丸山眞男）の関連性を問うた。最後に、本セッションの下準備と論点探査のため立ち上げた「『世界』初期号《つぶし読み》月例 Zoom ミーティング」について、司会の川本隆史より紹介と勧誘がなされ、実際に二名の会員がその後メンバーに加わるという成果を上げた。会場参加者は 17 名であった。